

## くらし

## 夢再び

## モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

ウランバートルからゴビ砂漠の恐竜産地へ向かって国道を南下する。最初は起伏のある草原が続くが、峠を越えるとはんと真つ平らな地形になる。生えている草はほとんどまばらになり、やがてヤギやラクダなどの家畜をやっと養える程度の草が点々と生える風景になる。そして多数の恐竜産地を擁する南ゴビ県まで500キロから1000キロ。延々とそんな風景が続くのである。

変化に富む日本の地形を上手に表している有名な歌がある。戦前からある「汽車」という文部省唱歌だ。「今は山中、今は浜、今に鉄橋渡るぞと、思う間もなくとンネルの、闇を通過して広野原」

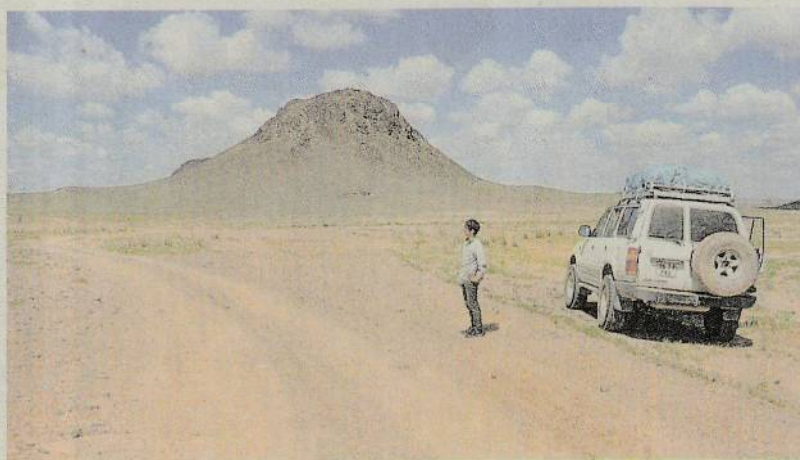
ゴビへ向かう四輪駆動車の中で、この歌のモンゴル風替え歌はどうなるだろうかと考えた。「今は砂漠で、つき砂漠、砂漠を通過して砂漠です。砂漠だ砂漠だ砂漠です、どこまで行っても砂漠です」。こう書くと面白くもなんともない。が、事実これに近い。それほどどこまで行っても砂漠である。

では、ゴビ砂漠のドライブは単調でつまらないかというと、そういうことはない。

## ⑫ 意外と楽しい砂漠の風景

## 小山点在SF映画連想

たとえば、新しい時代の黒っぽい溶岩が地表に顔を出している場所がある。森林国の日本と違いゴビ砂漠では地表すべてがよく見えるために、溶岩が地中から地表へと噴き出した過程などが手に取るように分かる。砂漠の広い大地に溶岩が



新しい時代に溶岩(玄武岩)が噴き出してきた小山。こんな小山が点在する地形はSF映画の中にあるような気分になる。

何でも見えるので数は少なくとも目を楽しませてくれる。野生のロバやガゼルは車と競走してくれるし、猛禽類はカッコイイ。

また、植生が乏しいとはいえ、日本ではあまり見ない植物が生えているので、それも目を楽しませてくれる。私が好きなのは「サクサウル」という高さ1〜2メートルの低木で、ゴビ砂漠の窪地や伏流している地下水があるようなところに点々と生えている。

そういうところでさらに谷筋の涸れ川などがあると、幹の直径が50センチ以上あるようなニレの木が生えていることがある。こういう場所は、とかく喉がカアアッと渴くような風景ばかり目にしてきた旅人にとって、ほんととするといいところである。

ただご用心、ご用心。そんなところは、実は動物にとっても、それに寄生する虫にとっても居心地が良い場所である。私の経験ではニレの木の下はいつもダニが多かった。(岡山理科大学教授)